

春の日のさした往来をぶらぶら一人歩いてゐる

芥川龍之介

青空文庫

春の日のさした往来をぶらぶら一人歩いてゐる。向うから来るのは屋根屋の親かた。屋根屋の親かたもこの節は紺の背広に中折帽をかぶり、ゴムか何かの長靴をはいてゐる。それにしても大きい長靴だなあ。膝——どころではない。腿も半分がたは隠れてゐる。ああ云ふ長靴をはいた時には、長靴をはいたと云ふよりも、何かの拍子に長靴の中へ落つこつたやうな気がするだらうなあ。

顔馴染の道具屋を覗いて見る。正面の紅木の棚の上に虫明けらしい徳利が一本。あの徳利の口などは妙に猥褻に出来上つてゐる。さうさう、いつか見た古備前の徳利の口もちよいと接吻位したかつたつけ。鼻の先に染めつけの皿が一枚。藍色の柳の枝しだ垂れた下

にやはり藍色の人が一人、莫迦に長い釣竿を伸ばしてゐる。誰かと思つて覗きこんで見たら、金沢にゐる室生犀星！

又ぶらぶら歩きはじめ。八百屋の店に慈姑くわゐがすこし。慈姑の皮の色は上品だなあ。古い泥でいしつばう七宝の青に似てゐる。あの慈姑を買はうかしら。謔をつけ。買ふ氣のないことは知つてゐる癖に。だが一体どう云ふものだらう、自分にも謔をつきたい氣のするのは。今度は小鳥屋。どこもかしこも鳥籠だらけだなあ。おや、御亭主も氣楽さうに山やま雀がらの籠の中に坐つてゐる！

「つまり馬に乗つた時と同じなのさ。」

「カントの論文に崇られたんだね。」

後ろからさつさと通りぬける制服制帽の大学生が二人。ちよい

と聞いた他人の会話と云ふものは氣違ひの会話に似てゐるなあ。

この辺そろそろ上り坂。もうあの家の椿などは落ちて茶色に變つ

てゐる。^{もつと}尤も崖側の竹藪は不相變黄ばんだままなのだが……お

つと向うから馬が来たぞ。馬の目玉は大きなあ。竹藪も椿も己

の顔もみんな目玉の中に映つてゐる。馬のあとからはモンジロ蝶。

「生ミタテ玉子アリマス。」

アア、サウデスカ？　ワタシハ玉子ハ入リマセン。——春の日

のさした往来をぶらぶら一人歩いてゐる。

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集 第十一卷」岩波書店

1996（平成8）年9月9日発行

入力：もりみつじゅんじ

校正：松永正敏

2002年5月17日作成

2004年3月7日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.waozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、
ボランティアの皆さんです。

春の日のさした往来をぶらぶら一人歩いてゐる
芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>